

加藤素毛の生涯と功績

万延元年遣米使節子孫の会

会員 日下部 格

加藤素毛は一八二五年、飛騨の五大老といわれた下原郷十七ヶ村の兼帯名主・加藤三郎右衛門の次男として生まれた。

この年徳川幕府は外国船打払令を発令し、攘夷・開国と国論は分れ、混乱と激動の始まりとなった。当時の影響を受けながら生きたのである。

素毛の家系は文雅を愛する家系であった。祖父は素有、父は素牧、兄は素石と、代々「素」の字を冠した雅号を持ち、漢詩・和歌・俳句を嗜んでいた。「素毛」も彼の雅号の一つである（本名は雅英）。

こうした文雅の家系に生を受けた素毛は、風月を友とし学を修め、向学心旺盛な青年となっていく。

二十三歳の時、高山で飛騨郡代・小野朝右衛門高福の公用人となった素毛は、国学を高山の地役人・山崎弘泰から、その子弓雄から和歌を、郡代の子鉄太郎（後の山岡鉄舟）と共に学んだ。鉄舟との親交はこの時から始まり生涯続いた。因みに、鉄舟の妻は高橋泥舟の妹であり、泥舟とは義兄弟の関係にある。

小野郡代は、内外の緊迫した情勢から、町人や農民を集め陣立て（軍事訓練）を行なった等のことから幕府のお咎めを受け、その責任をとって一八五二年閏二月二十七日に自刃したとの風評が流れた。（「天領史」等では病死となっている。）

その後、小野郡代の子供である鉄太郎は、同年七月に江戸に居を移し、その後山岡家の養子となり山岡鉄舟と名乗った。

素毛は小野郡代が亡くなる一月前に公用人を辞め、筑紫(九州)吟行の旅に出た。

特に長崎に強く惹かれ三ヶ月も滞在して外国文化の影響を受け、後の海外へ目を向けるきっかけとなった。（長崎がよほど印象に残ったのか、「長咲堂」の雅号を持つ）。またここで鉄翁和尚に絵を習っている。彼のスケッチの素養はこのとき養われた。

この筑紫めぐりは、彼が二十八歳から三十歳の春にかけてのことであった。

この吟行を詳細に書いた「^{かんざい}関西日記」「^{たびのころもしゅう}旅衣集」が遺っている。この吟行により詩想がますます豊かになっていったであろう。

素毛は国学を学んでいたのも、当然攘夷的な考えであったと思うが、この旅で多くの文人墨客や当時の知識人など会ったことにより、次第に開明的な考えに変っていったと思われる。

この間に二度にわたるペリー艦隊の来航や、ロシアのプチャーチンの長崎への来航があった。これに刺激を受けたかのように再び九州へ旅立っている。

九州から帰った素毛は、直ぐに国状を知るためか江戸へ旅立った。

江戸での行動ははっきりしないが、山岡鉄舟を訪問したり、多くの知識人や東禅寺に滞在している外国人に会ったりしたことは彼の書き遺した「接眉録」（交友録）から^{うかが}窺える。

また一八五八年に日米修好通商条約が締結され、アメリカへ批准書交換のための使節が派遣されることが決まり、その物資の調達や賄い方を伊勢屋が請け負うことになった。

素毛（当時三十三歳）の遣米使節随行が実現した事情は定かではないが、山岡鉄舟が関係したという説と、今一つは郷土史家・長瀬茂樹氏の研究によれば、伊勢屋の当主岡田平作と、素毛の家の近隣で親戚筋に当たる材木商の直井勘右衛門とは取引があり、岡田氏が商品（材木や船津鉾山の採掘物等）の調達等で飛驒に赴いた時には直井氏が常に素毛を連れて（素毛は筆が立つし計算早いため書記替わりにした）岡田氏に同伴していたため、岡田氏は素毛のことをよく知っていて、遣米使節の随員に文筆の立つ素毛を見染めた。という説があり、後者が有力と思う。勿論、鉄舟や江戸で知り合った上級武士たちの口利きがあっただろうことも容易に想像できる。

素毛は品川港出帆の前夜、^{かね}予て江戸遊学中の弟・四郎兵衛の下宿先で兄弟三人（素毛、四郎兵衛、^{しゅうこ}習古）揃って別れの杯を交わしている。

その際故郷の両親に宛てた手紙には、彼が千載一遇を得て未知の世界へ挑戦する喜びと決意、そして両親に対する親孝行の気持ちが表れている。この手紙の結びに

「^{とづくに}異国の世見に翌日の前途^{かた}かな」と詠んでいる。

この俳句には異国の文化を吸収し、それを記録しようとする意気込みが感じられる。航海中多忙な中でこの気持ちを貫き通し、多くの詳細な記録を遺したのである。

一八六〇年二月九日、七十七人の遣米使節一行は、品川沖でアメリカの軍艦「ポーハタン号」（黒船の一隻、日米和親条約はこの船の看板上で調印された）に乗り込み、盛大な歓送を受けて同十三日に横浜港を出帆した。

航海中、彼は賄い方という忙しい仕事の中で、メモや備忘録的な日記を書き、暇を見つけてはそれを纏めたものが「亜行航海日記」である。（アメリカのジョンストン大尉の手記によれば、「賄い方（キッチンセクション）が一番忙しい。朝早くから夜十時頃まで働いている。」と記している。）

また船の中では水が少なく、航海終盤には食料や調味料などが不足し苦勞したらしく、「ないないづくしの歌」（「二夜語」に歌詞が記述されている）を唄って気分を紛らわしたらしい。

※「ないないづくしの歌」の歌詞

〈ナイヤナイヤナイヤカラ、先第一二水かナイ、薪もナイ、炭もナイ、三度の食二菜かナイ、鮭の切り身八喰人かナイ、江戸から持越諸色かナイ、味噌もナイ、醤油もナイ、鰹節ナイ、干魚ナイ、こげた御飯八風味かナイ、たまたまうまいと替りかナイ、ハンはあれ共砂糖かナイ、諸人の小言も無理ハナイ、小言を云ても仕様かナイ、伊勢の親父八いくしかない、付添従者八つまらナイ、墨もナイ、筆もナイ、煙巾八尽て少もナイ、適有てもくれ人かナイ、貰と云ても売人かナイ、金銀有ても工夫かナイ、雪隠一つ間二谷ナイ、船将士官八あたじけナイ、深切かナイ、情かナイ、何と云ても分らナイ、航海するの二気張かナイ、石炭かナイ、風かナイ、船八行ナイ、帆八利ない、港へ着のも見当かナイ、地方へそんなに遠くナイ、風さへよけれ八訳ハナイ、ぶつぶついふてもきゝともナイ、御上の手当にねけめナイ、彼是いふの八勿体ナイ。〉

また、航海途中暴風雨に遭い、慣れていないので大変だったらしい。

その中でこれだけの詳細な記録を遺したことは、ただ驚きとしか言いようがない。

また海外へ行っても俳句に対する気持ちは捨て難く、多くの俳句を遺して遊び心も楽しんでおり、文人としての誇りを持ち続けている。

元朝日大学教授・吉村侑久代氏（現・日本俳句学会理事）の研究によると、海外で俳句を初めて詠んだのは素毛であり、彼を「海外俳句の先駆者」と称えている。

素毛がサンフランシスコから両親に宛てた書状の末尾に、「サントウイスと申す国に滞在 鶏鳥の中三鳥の声覚えければ」と前書きし、「**白の本へ渡りかけかも本と幾須**」の俳句が付記されており、故郷の玉龍寺老禅師にこの俳句を見せてほしいと添書きしている。（ハワイで鳥の声を聴き、それに触発して詠んだ句で、鶏鳥の中の三鳥とは、古今伝授の中の三種の鳥、すなわち呼子鳥・百千鳥・稲負鳥のことである。これを枕詞にして、かけ（鶏）、かも（鴨）、ほととぎす（時

鳥・不如帰)の三種の鳥を俳句に入れてその風流を詠んでいる。異国でさえ風雅の世界を詠む自己の世界を伝えたいとの意思が込められた俳句であるといわれる。)

当時の身分制社会の強い中で、唯一彼を支えたものは、文人としての誇りではなかろうか。文芸を通じて上級の武士たちとの交流もでき、帰りの船中では句会も催された。

ワシントンで五月二十一日に撮影したダゲレオタイプの肖像画写真を撮っているが、ほとんど使節一行が刀を差したりして撮っているのに、素毛は短冊と筆を持った写真を撮っており、自らの文雅の士としての特徴・誇りを表している。本人はこの写真が一番気に入っていたようである。

一昨年の夏に、東京大学資料編纂室から、写真研究の専門員の方が加藤素毛記念館へ来られて、素毛がワシントンで撮った写真原版(二枚)を解析されたところ、うち一枚はほぼ撮影した当時のままの状態と保存されており、「超一級品」との評価をいただいた。(当時の写真原版は六十数点確認されているが、中でも保存状態が最も良い、とのこと。)素毛は写真ケースがスッポリ収まる桐の箱に入れていたため、全く変色していない。

素毛の航海日記は多く、知られているだけで七種類あるが、その中でも一番詳細に書かれたのが「亜行航海日記」である。

これを基にして、後に携行のために「周海日記」や「亜行周海略日記」が書かれたと考えられる。

この「亜行周海略日記」を書写し、素毛の談話を書き加えてできたのが「二夜語」である。(「二夜語」については後述)

また、素毛が海外で詠んだ俳句(四十一首)、正使、新見豊前守の詠まれた和歌等を「航海誌文」として書き遺している。

素毛は、帰国後直ぐには故郷には帰らず、父親の記した箱書きによると、文久元年(一八六一年)六月二十二日夜に帰宅したとあり、帰国して半年程は江戸にいたことになる。

江戸で詠んだ俳句に「訪ふ友に異国はなしや冬ごも里」という一句がある。このように、多くの友人が素毛を訪ねてアメリカ帰りの話を聞いたようである。また、彼の「接眉録」(交友録)には、この時に会った人名が記録されている。

江戸に居る間に、航海中に書いた記録を書き改めたり、その後の土産話や将来品(外国から持ってきた品)の整理をしたと思われる。

彼のユニークさは、桜田門外の変以後攘夷の強まる中で、他の遣米使節の人達が攘夷派の襲撃を恐れて遣米の話を渋ったのに、彼は堂々と話をして歩いたことにある。

彼の持ち帰った将来品は、加藤素毛記念館の他、多くは南^{なん}比^ひ庵^{あん}観音寺（大阪府富田林にある寺院で、素毛の甥であった加藤^{かとう}鎮^{ちん}之助^{のすけ}が大正六年（一九一七年）に再興し、楠木正成夫人を祀る）にある。

当時の日米両国旗やアメリカの新聞・週刊誌・ブキャナン大統領の肖像画・トランプ等々、これらを「亜行秘巻」と名付けて持ち歩き、求めに応じこれらを見せながら、アメリカ帰りの話をしたようである。故郷でも近くの作り酒屋などに村人を集めて、面白おかしく講釈師さながら話をしたようで、昭和の始め頃までは彼の話聞いたという古老が近隣にいた。

彼の洋行談は、その後の日本の文明開化に少なからず貢献したものと確信する。

加藤素毛を世に知らしめたのは「二夜語^{ふたよかたり}」という書物である。

この書物は、尾張藩の重臣・大道寺直寅が、当時評判であった素毛の世界一周の話を聞いて感銘を受け、又話に虚妄のないことを知り、用人水野正信に命じて、素毛の日記を借り受けて書き写し、素毛の話の内容を書き加えたものであり、蓬^{ほう}左^さ文庫^まに収められている。

（水野正信は微禄の士ではあったが、藩きっての教養人で膨大な蔵書と筆録を遺している。外交関係の情報についても貪欲にこれを収集し、「資治^{ざい}雑^{ざつ}笈^{おし}」の編著がある。「二夜語」はその中に収められている。）

一九六〇年日米修好百年の記念行事が横浜で開催された。これを期に「遣米使節史料集成」全七巻が発刊され、その第七巻にこの「二夜語」が収録されて、素毛の名が注目されることとなった。

素毛は航海中、ワシントンから両親に宛てた手紙（日本へ向かう商船に預けた）には、「帰国後幾々は士官への道を考えている」旨の記述があるが、帰国してみると尊皇攘夷の風が吹き荒れており、また武士の生活の息苦しさ等に嫌気がさしたのか、引き続き自由人を選び、請われるままに各地を転々として、帰国話や吟行の旅に生涯を費やした。

彼の詠んだ俳句や和歌は何万首とあり、米粒のような小さい字で書き綴っている。彼の俳句は、たいへん読みやすく素直な句風で、各界の著名人との交流も多く、各方面から親しみと尊敬の念で歓迎されている。彼は芭蕉十哲の一人・各務支考が興した「獅子門」（別名・美濃派）の同人で、各地の同門の人の家に泊まり、句会等を催してもいる。

彼は、生涯を独身で通し、各地を飛び回っていたためか、地元の人たちは彼のことを“煙霞^{えんか}の人”と呼んでいたとか…。

生涯を、自由気儘を好んで送った加藤素毛。彼がこのような一生を過ごせたのも、両親始め兄弟・親戚の方々の有り難い理解と協力があったのことに思う。

明治十二年（一八七九年）五月十二日、郷土の偉人・加藤素毛逝去、享年五十五歳。お墓は玉龍寺の上の墓地に祀られている。

（墓石には、彼の俳号である「加藤素毛の墓」と刻まれている。）

〔追記〕

長崎への旅（明治四年）で詠んだ俳句（『桃の旅集』）に収録、海外で詠んだ俳句（『航海誌文』に収録）の一部を紹介します。

【『桃の旅集』より】

位山近きほとりに七歳の 春秋をおくり今年弥生のはじめ無分別に漂泊を思 杖笠を携え靈芝の
破屋を立ち出る事とはなりぬ ・「たのもしきぞ運や桃の花ざかり」

水無の宮に詣うで 『位山社殿の騒をふみ分けていつか登らん言の葉の道』（和歌）

中山七里をたどりて・『さくら花移ろう影も深谷の 水さえ匂う心地こそすれ』 孝池水

・『親に孝尽くせし人の真心もくみてこそ知れ瀬戸の池水』（和歌）

去年の卯月八日身まかり給いし 父君の墓前に礼拝して

・「あら悲し面影草を見るにつけ」 関に名高き善光寺に詣で

・「法の火のきえぬ思いぞ花卯木 此の祉洛中眞を祝い八坂の社へ
砂もてるを見て興ず

・『ただすや卯の花衣着揃いて運ぶ砂こそ神も愛ずらん』（和歌）

こがれて暑さに牛の舌と吹きはれて 先哲の句も思い出されて

・「日の岡や鳥も若葉の蔭で鳴く」 五月中の五日浪花を船出するとき

・『難波^{なにわ}通^とう千船^{せんせん}のその中に異^い国^{こく}ぶ^りは煙^{けむり}立^たてゆ^く』（和歌）

【『航海誌文』より】

川越^{かわごへ}を船出^{ふねで}の時

・「祝砲^{しゆほう}の音^ねも勇^{ゆう}ましき船出^{ふねで}かな」

横浜^{よこはま}港^{みなと}を出港^{しゅつこう}して

・「我国^{わがくに}の春^{はる}にこころの残^{のこ}りけり」

難風^{なんふう}に遭^あうていとあやし^あくし

・「海^{うみ}荒^あれていとどころも靡^{おぼろ}かな」

白檀^{びやくだん}の生^なぜし雲香^{うんこう}山^{さん}を見^みて

・「山^{やま}よりも匂^{にお}う朝日^{あさひ}の出^いしほかな」

パナマ^{パナマ}港^{みなと}に上陸^{じやうりく}して蒸気^{じやうき}車^{くるま}にて垂^たの四^よ十^{じゅう}五^ご里^りを吾^{われ}一^{いつ}時^じに走^はる

・「裂^ひくる程^{ほど}車^{くるま}の音^ねも暑^{あつ}さかな」

郭公^{かくこう}の飛^とび行^いくを見^みて

・「日^ひの本^{もと}へ渡^{わた}りかけかもほととぎす」

使節^{しせつ}に従^{したが}い条約^{じやうやく}書^がを持^もち王城^{おうじやう}に至^{いた}りて

・「高殿^{たかどの}や黄金^{こがね}白金^{しろがね}きらびやか」

…男女^{おとこ}美^めを尽^{つく}して一^{いち}千^{せん}五^ご百^{ひゃく}人^{にん}ばかり音^ね楽^{がく}をなして舞^ま踊^{おど}り 是^{こゝ}は和親^{わしん}調^{てう}い^の喜^き祝^{しゆ}とみ^る

・「めづらしや異^い国^{こく}ふ^りの舞^まをど^り」

ワシントン^{ワシントン}の都^{みやこ}に在^ありし頃^{ころ}亜^あ人^{にん}風^{ふう}船^{せん}とい^うもの^に御^ごして蒼^{あお}天^{あま}に飛^ひ揺^{よう}せしを見^みる 一^{いち}人^{にん}乗^{のり}てニ^にュ^ュー^ーク^くの方^{かた}へ急^{いそ}用^{よう}に行^いくとい^う この間^ま百^{ひゃく}里^り也

・「月^{つき}ならで風^{かぜ}船^{せん}高^{たか}し夕^{ゆふ}まぐれ」

喜望^{きぼう}峰^{ほう}の沖^{みづ}を過^かる波^{なみ}風^{かぜ}強^{つよ}し

・「秋風に船の煙の行方かな」

九月十三日夜清の香港に泊して

・「嗚呼見たり唐にて後の月ながら」

九月二十八日帰東しけるに横浜の人々 日本は今日二十七日也といひける 周海の中に一日の違いあり

・「三万里めぐりて一日設けけり」

周海帰東の後東京に寓居せしに雅浴夜つどいて各地の物語を乞われはべる

・「訪ふ友に異国はなしや冬こもり」